

新任教員紹介



佐藤 和喜

十二年ぶりに都内で勤務することになったが、前任校宇都宮大学での十二年間は、私を取り組んできた和歌研究において、意義深いものがあつたと思つている。その赴任にあたって転居した埼玉や勤務地の栃木には、和歌を追体験し得る環境があつたことも大きい。赴任一年目の五月、JR東北線小金井駅から東武線野州大塚まで四時間余歩いたことがあつた。両側に田畑の広がる道をのんびりと歩いては、雲雀が高々と上がつて囀っている光景に心がひかれ、立ち止まって見とれることが何度かあつた。それまでそのような光景に接することがなかったからだが、ことに空高く上がつている雲雀が急速に落下して鳴き鎮まる様子に、何とも言えない快感を感じた。そ

の時、大伴家持の

うらうらに照れる春日に雲雀上がり心悲しもひとり

し思へば

(万葉集四二九二)

を思い出しているのであつたが、ふと、この家持歌は一般に解されているような春愁の歌ではなく、春の讃歌ではないかと思ひ至つた。その思いつきを論理化して「讃歌としての「春愁三首」」(『文学』'88・2)にまとめたが、その後、同じような体験をしているうちに、右の家持歌の「うらうらに照れる春日に雲雀上がり」は、人の位置から雄の雲雀を眼差す表現だが、「心悲しもひとりし思へば」は雄の雲雀に転位して、高々と上がった雄が急速に落下して雌のもとに行く、その激情を表す形になっているのだと感じるようになった。そのような目で万葉歌を見直すと、同じような転位を見ることのできるものが少なくないことに気づいた。例えば、

志賀の海人の釣し灯せる漁火のほかに妹を見むよ

しもがも

(万葉集三一七〇)

では、その上三句は海人が魚を釣るのを人が眼差してい

る景の表現であり、下二句の心の表現は魚が進んで漁火に寄っていく、そのような形での激情表現となっていると見られるのである。有馬皇子の結び松の地を訪れた長忌寸意吉麻呂が歌った、

岩代の野中に立てる結び松心も解けずいにしへ思ほ

ゆ

(万葉集一四四)

にしても、歌い手が岩代の野中の結び松を見て有馬皇子を思っているうちに、有馬皇子の霊に憑依されてその心を表していると思われるのである。

こうした転位ということは、しかも、古代にのみ特有なことではない。近代の作家の作品にもそのようなことが語られているのであり、例えば梶井基次郎の作品には、五位鷺が鳴いているのを聞いているうちに、その声が自分の身体のどこかでしているように感じられる(「城のある町にて」)とか、風に吹かれている草を見つめているうちに、自分のうちにもその草の葉のように揺れているものがあるのを感じる(「泥濘」)という体験が語られている。「視ること、それはもうなにかなのだ。自分の

魂の一部分あるいは全部がそれに乗り移ることなのだ」(「ある心の風景」)とも言われている。思えば、中世の夢幻能なども、人(生者)から神(死者)への転位を語るものであるだろう。転位ということは、古代和歌のみならず、日本の文化・芸術を考える上での鍵語たり得るのである。

現在の大学教育において和歌を語ることの困難さが指摘されている。都会の学生に対しては一層そうであろう。しかし、和歌が転位という、言ってしまうえば狂気を表すものであることは、現在の都会の学生たちにも決して無縁ではないはずである。都会生活者は常に狂気への契機を内在させているからであり、その狂気を表現する装置を求めているからである。和歌が古来、貴族をはじめとする都市の生活者のものであったのも、和歌が都市生活者が孕まざるを得ない狂気を開放する装置であったことを示している。

こうした和歌を角度に、学生たちの心に迫りたいと思っている。

(国文学科)